

シンガポール国立大学 シミュレーションセンター

EXPERIENTIAL SIMULATION PROGRAMME 報告書

医学科 6 年 143004 安部美森

1. 研修内容

シンガポール国立大学における正規のカリキュラムであるシミュレーショントレーニングプログラムに、シンガポール国立大学の実際の学生とともに実習チームのメンバー1人として参加する。

2. 研修期間

2019年7月1日（月）～7月12日（金） Posting 1

3. 宿泊先

NUS Prince George's Park Residences (non-air-con room/\$52 per night)

4. 実習内容

- ・スケジュール

Date	Time	Module/Lesson	Venue
01 July 2019 (Monday)	07:45	Basic Cardiac Life Support Re-certification & Automated External Defibrillation	MD 6, Level 3
02 July 2019 (Tuesday)	07:45	Day 1 – Advanced Cardiac Life Support Full Certification	MD 6, Level 3
03 July 2019 (Wednesday)	07:45	Day 2 – Advanced Cardiac Life Support Full Certification	MD 6, Level 3
04 July 2019 (Thursday)	08:15	Basic Clinical Procedural Simulation (skills)	
05 July 2019 (Friday)	07:45	Computer Based Simulation	MD 6, Level 3
08 July 2019 (Monday)	08:15	Paediatrics & Airway Simulation	MD 6, Level 3
09 July 2019 (Tuesday)	07:45	TeamSTEPPS	MD 6, Level 3
10 July 2019 (Wednesday)	07:45	Crisis Simulation	MD 6, Level 3
11 July 2019 (Thursday)	08:15	Advanced Clinical Procedural Simulation (skills)	MD 6, Level 3
12 July 2019 (Friday)	07:45	Professionalism in Action	MD 6, Level 3

・プログラムの詳細

チームシミュレーションにおいては、本学の学生は2人1組となり、NUSの学生たちのグループに組み込まれ、彼らとともにトレーニングを行った。トレーニングは教員一人が配置されたステーションと呼ばれるそれぞれの部屋をグループごとに回るという形式で進行した。本学の学生の組み分けはあらかじめ決められており、3日目頃から固定となった。同じグループとなるNUSの学生のグループは日ごとに流動的で多くの学生と実習を通じて関わる事が出来た。

1 週目

7/1<BCLS-AED>終日グループごとにトレーニング

BCLSのプロトコルやQualityを意識した胸骨圧迫、AEDの使い方、窒息介助方法について成人だけでなく、小児と乳児についてもトレーニングを行った。

7/2<ACLS>午前：講義 午後：グループごとにトレーニング

午前の講義はあらかじめメールで配布されたスライド資料や教科書をもとに進められた。ACLSの範囲ではあまり要求されない心電図波形の読み取りなどの踏み込んだ内容もみられた。午後のトレーニングは頻脈、徐脈、心停止などのステーションが設置され、除細動器の使い方やチームでの蘇生行為のトレーニングを行った。全てのスケジュール終了後 Professor が本学の学生向けに疑問に答える形で追加の講義をして下さった。

7/3<ACLS>終日グループごとにトレーニング及びテスト

ACLSの実技と筆記での試験が行われた。本学の学生も一人一回リーダーを務めた。筆記試験は合格点数に達しなかった場合、追試が行われた。前日の夜に集まって勉強したことも功を奏し、全員合格することが出来、最終日に合格証を受け取った。

7/4<Basic Clinical Procedural Simulation>終日グループごとにトレーニング

手術及び輸血の同意取得、手洗い・ガウンテクニック、NGチューブ・輪状甲状間膜切開、ドレーン・ホチキスによる閉創とその針除去、ルート確保・血培の取り方、Aガス採取・インスリンとモルヒネの希釈及び投与・I/Oライン確保、尿道カテーテル・恥骨上カテーテル、エコー、の全8ステーションを終日かけて回った。

7/5<Computer Based Simulation>終日各自で学習

主に救急外来にきた患者さんをパソコンの画面上で問診、身体所見、検査から診断し、薬剤投与、コンサルトを選択し救命するというbody interactというソフトを用いて各自学習を行った。聴診などの身体所見は実際の音をイヤホンで聞くことが出来る。全24症例を一日かけて学んだ。

2 週目

7/8<Paediatrics & Airway>終日グループごとにトレーニング

呼吸管理はラリンジアルマスクの使い方や気管挿管について学んだ。小児は症例のシミュレーションを通じて呼吸管理や親も含めたコミュニケーションについて学んだ。全てのプログラム終了後、前週のComputer Based Simulationについての解説講義が行われた。

7/9<Team STEPPS>午前：講義 午後：グループごとにトレーニング

4つのシナリオを通じて学習した。

7/10<Crisis Simulation>終日グループごとにトレーニング、終了後解説講義

自身の所属するグループで4シナリオ、一方のグループの観察で4シナリオの全8シナリオを経験した。

7/11<Advanced Clinical Procedural Simulation>終日グループごとにトレーニング

縫合と糸結び、胸腔穿刺及びドレナージ、CVライン確保、腰椎穿刺、VRを用いたマスカジュアルティ現場でのトリアージ・解剖学、の全5ステーションを終日かけて学んだ。VRのマスカジュアルティ現場シミュレーションは今年新たに開発されたものであった。

7/12<Professionalism>午前：講義 午後：グループごとにトレーニング、終了後解説講義

午前は医師の倫理観、IC、Bad news breakingなどについての講義が行われた。午後は患者さん役の役者に対してNUSの学生一人が問診を行い、それについて教師を含め全員でディスカッションを行うトレーニングを全8シナリオ行った。

5. 感想等

・出発前の準備について

私の参加したPosting 1ではAHA ACLSプロバイダーの資格を取得している学生が私を含め3名いたため、出発前に3回ほど全員で集まり、BLSとACLSのプロトコルの確認とシミュレーション練習を日本語と英語の両方で行った。加えて、昨年経験手技リストをもとに、全員で手分けして手技の適応・禁忌・合併症について調べ、共有を行った。どちらも英語で専門用語を聞きとらなくてはならない場面の助けになったと感じる。

・現地での生活について

平日は基本的に7:45-8:15にその日のプログラムが開始し、終わりは1週目及び2週目の数日は18:00、2週目のその他の日は22:00-23:00の間に終了することがあった。早くにプログラムが終了した日はショッピングやディナーに出かけることが出来た。NUSの学生と夕飯を共にすることも何回かあった。ACLSのテストの前日は全員で集まり、復習を行いテストへ備えた。

ランチ及びティータイムのお菓子は学校側から提供されることが多く、朝ご飯と夕ご飯を各自で調達していた。寮は一人部屋でベッドと机が備え付けられており、シャワーとトイレは共同だった。洗濯はコインランドリーでしていた。部屋にエアコンがないことは事前に分かっていたが、天井に備え付けのファンを使用することで夜も眠ることが出来た。休日は本学の学生で観光地に出かけただけでなく、NUSの学生に案内をしてもらうなど交流を深めた。帰国日には空港の近くのレストランでお別れ会を開いてくれ、連絡先を交換するなど沢山の友人を作ることが出来た。

・英語について

私自身の一つの懸念材料であった英語だが、はじめの3日間は集中しなければ講義のスピードについていけず、とても疲労を感じていた。しかし日がたつにつれ耳が慣れてくることに加え、NUSの学生達やProfessorが非常に親切であり、分からない単語や講義の疑問点を解説して下さり、段々と英語を聞くことがストレスではなくなっていく。毎日のランチタイムはNUSの学生たちと過ごしたが、積極的に話しかけてくれ、伝わらなかった場合にも根気よく理解しようとしてくれる姿勢に助けながらスピーキング力を養うことが出来たように思う。最終的には日本とシンガポールの医療制度の違いや政治体制などの高度な話題についても会話をすることが出来たことをとても嬉しく感じる。

・プログラムについて

本プログラムの内容は、科が限定された病棟実習に参加するものとは異なり、将来どの専門科に進むとしても役立つ、医師として欠かせない基本的な手技やコミュニケーションに関わる講義やトレーニングであった。特に日本では体験したことのない、実際の症例に基づいて非常に良く練られたシナリオをチームとして解決していくトレーニングはとても新鮮に感じられた。それらのトレーニングを通じて私の感じた本学における教育と大きく異なる点として、コミュニケーションに関するトレーニングの量が増えられる。NUSの学生たちは薬剤投与量や形態などに関する実践的な医学知識を身につけていることも私たちと大きく異なる点ではあるが、何より患者さんへのICやチーム内での役割分担と情報伝達など、実臨床での即戦的なコミュニケーション技術を低学年の頃から教育されていると聞いた。コミュニケーションの理論を学ぶことはもちろん重要であるが、学生の内から実際の臨床現場と類似した緊張感の中、実際の症例を通してコミュニケーション能力をつけられるプログラムの必要性は大きいと考えられる。従って、本プログラムはどのような学生にとっても学びの大きい内容であると感じ、是非より多くの本学の学生がNUSで学んでほしいと思う。

・留学を終えて

本プログラムを通じてまず、私と同じ医学部の最終学年であるNUSの学生たちの能力の高さに驚かされた。彼らは臨床現場に直結した医学知識と技量を持っており、日本では学生の内にもそこまで求められていないことは理解できるが、現状に満足せず世界標準と照らし合わせて自身の様々な不足をはっきりと感じることが出来たのはとても有意義なことであったと思う。残りの病棟実習や国家試験に向けての勉強においても、学ぶ医学知識を机上のものに留まらず、実臨床に応用することを常に考えて勉強していこうと考えている。

そして何より現地の学生や先生方、大学職員の方々の温かさに感動した。シンガポールで出会った方はどの方も異文化に生きる私たちが快く受け入れ、いつも細やかに気遣って下さり、困難に直面した時はすぐに助けとなって下さった。この2週間を通じて沢山の友人、人生の中で出会えてよかったと心から思える先生に出会うことが出来た。こうして現地に実際に行かなければ理解することが出来ない人の温かみを何度も感じる事が出来たことが、何よりも貴重な経験であったと思う。自ら現地に赴きそこに生きる人々と触れ合うことで初めて異文化理解が始まるということを感じ、これからも忘れないでおきたい姿勢であると強く感じた。

この場をお借りして、本プログラムへの参加をご支援くださった医学部後援会様、俱進会様をはじめ全ての皆様に感謝申し上げます。この留学で得た素晴らしい経験を忘れず、これからも勉学に励みひいては良い医師となれるよう、より一層努力して参ります。